

## 業界の形成と変容

——フリグスタインらのフィールド理論の検討——

小 川 慎 一

### 1. はじめに

本論文の目的は、アメリカの社会学者フリグスタイン (Neil Fligstein) とマックアダム (Doug McAdam) が提唱するフィールド理論が、業界の形成と変容を説明・記述する理論としてどの程度有望であるのかについて、彼らの著書である*A Theory of Fields* (『フィールドの一理論』, Fligstein and McAdam 2012) に基づいて検討することにある。「業界」という日本語に対応する英単語のひとつはindustryであり、この英単語は「産業」という日本語にも対応する。本論文ではあえて「産業」ということばではなく、fieldの語感を意識して「業界」ということばを使用する。

というのも日本の社会学において、fieldという英語に対応するフランス語であるchampが、フランスの社会学者ブルデュー (Pierre Bourdieu) の研究を翻訳する際に、「場」や「界」という若干わかりにくい日本語訳で紹介されてきた (Bourdieu 1979=1990) もの、経済活動領域を指し示す日本語としては、「業界」が語感的に近いと考えられるからである。もうひとつ、「産業」ではなく「業界」の語を本論文で使用する理由は、「業界」の語がより広い対象を包摂する概念であると考えられるからである。「業界」の語であれば、狭義の「産業」を指し示すだけでなく、たとえば「職業」などの経済的・社会的な諸活動を含む概念として違和感なく使用することが可能である。

フィールドとは一般に、複数の行為者 (個人あるいは企業や組織などの集合体) が、共有する目的をめぐって行為する社会空間を指す。たとえば、フランスにおける場合のように、エリート教育を通じて高級官僚や大企業の幹部を目指す諸個人は、共通するフィールドを構成しているといえる (Bourdieu 1989=2012)。組織の場合であれば、同業の企業は共通するフィールドを構成しており、組織フィールドという概念で表現される (DiMaggio and Powell 1991a)。

フリグスタインとマックアダムによるフィールド理論に注目する理由は、企業など個々の組織のみを分析対象とするだけでなく、上述のような「業界」を分析単位として扱うことを可能とするからである。企業をはじめとする組織は単独で事業をおこなっているわけではない。同業者と競争するだけでなく、協力や対立など社会的な相互関係のなかで活動している。こうした相互関係の過程や動態を扱ううえで、彼らのフィールド理論は有望であると考えられる<sup>1</sup>。

## 2. フィールド理論としての新制度派組織理論

フリグスタインとマックアダムスのフィールド理論について説明するまえに、彼らの研究の位置づけについて簡単に見ておく。フリグスタインは組織社会学や経済社会学、政治社会学の領域で研究業績がある。組織社会学や経済社会学においては、新制度派組織理論の代表的論者として位置づけられている (Powell and DiMaggio 1991; 佐藤・山田 2004)。マックアダムスは社会運動論を専門とする政治社会学者であり、政治的機会行動論や政治過程論の代表的論者として知られる (片桐 1995: 33-7; 長谷川 2003: 74-8, 富永 2025: 91-129)。

フリグスタインの代表作のひとつである *The Transformation of Corporate Control* (『企業コントロールの変容』, Fligstain 1990) では、1880年以降のアメリカ大企業における支配的な経営スタイルの変容を、conception of control という彼の創出したキーワードを中核に分析している。以下では、組織社会学者の佐藤郁哉と山田真茂留にしたいが、conception of control の日本語訳として「企業コントロールに関する基本認識」(佐藤・山田 2004: 152) の表現を用いる。なお、『企業コントロールの変容』の概要は、佐藤・山田 (2004: 150-68) で紹介されている。以下では、新制度派組織理論の著作としての同書について概観しておく。

企業コントロールに関する基本認識とは、フリグスタインの定義によれば、「競争上の問題をどう解決すべきかについて企業が有している視座であり、組織フィールドにおいて集散的に維持され反映されている」基本認識 (Fligstain 1990: 12) を指す。

経営史家のチャンドラー (Alfred DuPont Chandler, Jr.) は、「組織は戦略に従う」というよく知られたフレーズに象徴されるように、企業規模の拡大に伴う多角化や事業部制が経営戦略上、効率的であったから普及したと説明する (Chandler 1990=2004)。それに対してフリグスタインは、組織構造が経営戦略の観点から効率的だったから普及したというよりも、政府による反トラスト法の改正により生じた不確実性を低減したい大企業が、成功している他社を模倣した結果、普及したのだと説明する (Fligstain 1990: 12)。

フリグスタインによれば、アメリカ大企業において支配的である、企業コントロールに関する基本認識は、つぎのように移り変わっていったのだという。①直接的コントロール (19世紀末~20世紀初頭)、②製造によるコントロール (1920年代)、③販売とマーケティングによるコントロール (第二次世界大戦後~1950年代半ば)、④財務によるコントロール (1960年代以降)、である。1960年代以降のアメリカ大企業における企業コントロールに関する基本認識は、これら4つの組み合わせから成り立っているとされる (Fligstein 1990: 12-6)。

また、フリグスタインは企業を一枚岩の組織ではなく、部門などのサブ組織から構成される集合体と見なしている。サブ組織のメンバーは経験してきた能力開発や業務内容が異なるため、支持する企業コントロールに関する基本認識も異なる。製造によるコントロールが支配的な時代であれば製造部門、販売とマーケティングによるコントロールが支配的であればマーケティング部門、財務によるコントロールが支配的な時代であれば財務部門が社内での強い権力を持つ

<sup>1</sup> 筆者は、日本における高度ホワイトカラー職業紹介事業の誕生や変容を研究対象としてきた (小川 2017, 2020, 2022)。本論文は、高度ホワイトカラー職業紹介事業の誕生や変容を記述・説明する理論として、フリグスタインとマックアダムスのフィールド理論がどの程度有望であるのかを探る意図も含まれている。

ことになる（Fligstein 1990: 17-8）。

新制度派組織理論の特徴は、組織フィールドを構成する行為者（組織）によって共有され維持される観念として、制度を把握する点にある（DiMaggio and Powell 1991b；佐藤・山田 2004: 171-252）。企業コントロールに関する基本認識は、アメリカ大企業という組織フィールドに共有され維持される観念という点で、新制度派組織理論における制度に相当する概念である。フリグスタインは、サブ組織自体も所属従業員から構成されるフィールドとして、また所属従業員が観念を共有しうる制度的存在として捉えており、彼とマックアダムによるフィールド理論の萌芽がすでに、『企業コントロールの変容』に現れているといえる。

### 3. 制度としての市場

フリグスタインは、行為者によって共有され維持される観念としての制度を、組織フィールドだけでなく市場を捉える概念へと適用を拡張する。*The Architecture of Markets: An Economic Sociology of Twenty-First-Century Capitalist Societies*（『市場のアーキテクチャー——21世紀資本主義社会の経済社会学』）のPart Iでは、市場形成における政府の役割や、安定的な市場が形成・維持される条件を理論的に考察している。フリグスタインは、市場構造が市場への参加者による認知的理解と具体的な社会関係の2つから構成されているとする。そのうえで、市場の社会学を展開するにあたっての第一義的な理論的な問題は、どのようなルールや理解が構造化された交換を可能にするかを特定することにあるのだという。

構造化された交換を可能にするルールとして、フリグスタインはつぎの4つを挙げる。すなわち、①財産権、②ガバナンス構造（governance structures）、③交換ルール、④企業コントロールに関する基本認識、である。財産権は企業利益の分配を規定するルール、ガバナンス構造は競争・協調関係や企業がどう組織されるべきかを規定する社会一般のルール、交換ルールは交換の当事者や交換が実行される条件を規定するルールである。企業コントロールに関する基本認識はすでに紹介したとおりの定義である。これらのルールは、企業や国家により歴史的に形成される（Fligstein 2001: 28-35）。

続いてフリグスタインは、市場形成について理論的な検討を行いつつ、一連の命題を提示する。命題はつぎのとおりである（命題における最初の数字は、Fligstein 2001の章番号に対応している）。命題はいずれも、定量的か定性的かを問わず、検証可能な命題として構成されている。

命題2.1. 国家は資本主義の段階に移行すると、市場安定化のために財産権やガバナンス構造、交換ルール、企業コントロールに関する基本認識の発展を促進する。

命題2.2. 財産権やガバナンス構造、交換ルールへ影響を与える、初期の政策ドメインやルールの形成は、当該社会の構成を規定する文化的テンプレートの源泉となり、新たな市場の発展のあり方を方向づける。

命題2.3. 国家はつねに市場の危機を注視し続ける。市場はつねに変容しており、また企業や労働者は国家へ介入を働きかけるからである。

命題2.4. 政策ドメインには政府組織をはじめ、企業、労働者、その他団体の代表が含まれる。これらは、(1) 国家が介入、規制、仲介する能力や、(2) 介入を実行する社会集団の相対的な権力関係にしたがって組織される。

- 命題3.1. 資本主義経済の持続的成長には、政労資間の紛争の政治的解決、ならびに財産権やガバナンス構造、交換ルールの形成による紛争解決ルールの制定が必要である。
- 命題4.1. 新規市場の形成期において、企業コントロールに関する基本認識や競争をコントロールする政治的連携を形成することができるのは、大企業であることが多い。
- 命題4.2. 企業内の権力闘争は、企業が競争に耐えうるよう最適に組織する方法を、だれが解決するのかをめぐって展開される。闘争の勝者は、自分たちの組織文化や組織デザインを企業に押し付ける。
- 命題4.3. 意図的行為や非意図的行為により、国家は企業コントロールに関する基本認識を安定化しようとする企業の行為を阻止することができる。
- 命題4.4. 新規市場における「新規性の不利益」(liability of newness)は、社会構造や企業コントロールに関する基本認識の欠如を反映している側面がある。すなわち、これらの欠如は市場参加者に競争をコントロールする能力がないことを反映している。
- 命題4.5. とくに他市場からの企業が新規市場に参入する場合において、新規市場は隣接市場から企業コントロールに関する基本認識を借用する。
- 命題4.6. 安定的な企業コントロールに関する基本認識を有する市場では、市場参加者が企業コントロールの基本認識やそれを含意する地位の序列について、広く賛同している。
- 命題4.7. 有力企業 (incumbent firms) は劣勢企業 (challenger firms) ではなく、ほかの有力企業の行為を注視する一方、劣勢企業は有力企業の動向を注視する。
- 命題4.8. 安定的市場における企業は、外部からの新規参入 (invasion) や全般的な経済危機に直面しても、支配的な企業コントロールに関する基本認識の使用を継続する。
- 命題4.9. 市場の危機は有力組織が失敗し始めるときに観察される。
- 命題4.10. 既存市場の変容は新規参入や経済危機、国家による政治的介入といった外生的要因により発生する。
- 命題4.11. 新規参入企業は遠方の市場ではなく、近隣市場の企業であることが多い。
- 命題4.12. 企業が失敗し始めると組織内の権力闘争が過熱し、トップ人員の離職が増加するとともに取締役会や取締役外の株主からのアクティヴィズムが活発になる。
- 命題4.13. 市場構造の複雑性や市場規模の拡大は、社会における経済成長の脆弱性ではなく安定をもたらす傾向にある。企業の製品の多様化や経済の多様化により、企業や経済がより安定するからである。
- 命題4.14. 規模が大きく多様化した経済はより安定しており、深刻な景気後退に陥りにくい。多様性によって特定の経済成長の源泉に依存せず、極端な変動を回避できるからである。
- 命題4.15. 市場の複雑性は市場間を強く結びつけるのではなく、弱く結びつける。全体的な効果として、特定市場の景気後退や恐慌は近隣市場に影響しうるが、こうした影響は急速に緩和され経済全体には波及しない。
- 命題4.16. グローバル市場の出現は、交換ルールや財産権 (例：企業が利益を占有できる保証)、ガバナンス構造 (競争の方法) の形成に向けて、企業と国家が協力できるかに依存する。世界貿易の増加により、政府間の広範な協力を促進する協定への需要が高まる、という仮説が考えられる。

フリグスタインは市場の社会学的分析を、欧州連合における国家間の市場統合や、それが

ヨーロッパの人々に与えた影響の分析へと、適用を拡張している。彼の著書*Euro-Clash: The EU, European Identity, and the Future of Europe*（『一枚岩でないヨーロッパ——欧州連合とヨーロッパ人のアイデンティティ、ヨーロッパの未来』）は、欧州連合における市場統合が域内貿易や雇用の増加を生み、国境を越えた企業の再編を促進したことを示したうえで、市場統合によって便益を得た人々とそうでない人々とのあいだで、アイデンティティの違いが生じていることを示した。

市場統合により国境を越えたビジネスを通じて便益を得ており、また他国民との交流の機会が多い、企業の所有者や役員・管理職、専門職、ホワイトカラー、高学歴者、若年層は、自分たちをヨーロッパ人であると考えた割合が高い。その一方で、国境を越えたビジネスによる便益を得ておらず、他国民との交流の機会が少ない、高年齢者や低所得者、低学歴者、ブルーカラーは自国にアイデンティティを置く傾向にある。中間層は欧州連合を肯定的に評価しているものの、自分たちをヨーロッパ人であると考えたこともあれば、そうでない場合もある（Fligstein 2008）。

フリグスタインのおもな研究上の関心は、企業や組織といった集合体の動態に置かれている。しかし、同書では珍しく、市場の変容が個人へ与える影響に分析の射程が広げられている。

#### 4. フリグスタインとマックアダムのフィールド理論

フリグスタインは以上のような組織社会学的、経済社会学的、政治社会学的な研究を踏まえ、より一般的なフィールド理論を展開する。社会現象一般と同じく、フィールドにもかならず始まりがある。突然最初から集合体としてのフィールドが出現するわけではなく、フィールドはひとりの個人ないしは少数の諸個人から始まる。フィールドの萌芽は社会運動と同じように個人の活動から始まることを踏まえ、フリグスタインは社会運動の社会学者であるマックアダムと共著『フィールドの一理論』（Fligstein and McAdam 2012）で、フィールドの一般理論を展開する。

##### 4.1 フィールド理論の中心的要素

同書では、フィールド理論の中心的要素として、つぎの7点を挙げる（Fligstein and McAdam 2012: 8-9）。

- (1) 戦略的行為フィールド（strategic action fields）
- (2) 有力者（incumbents）と劣勢者（challenger）、ガバナンス機構（governance unit）
- (3) 社会的スキル（social skill）と生に根ざした社会関係の機能（the existential functions of the social）
- (4) フィールドをとりまく広範な環境（the broader field environment）
- (5) 外生的ショックと動員、紛争の発生（onset of contention）
- (6) 紛争の継続（episodes of contention）
- (7) 決着（settlement）

これらの概念はそれだけを見ても指し示す対象の理解が困難で、それもあつて的確な日本語

に訳すことも難しい。それぞれの概念について、フリグスタインとマックアダムの説明に従って要約し理解すると、以下のとおりである。

### (1) 戦略的行為フィールド

戦略的行為フィールドは、「行為者（個人あるいは集合体）がフィールドの目的やフィールドにおける他者との関係（だれがなぜ権力を有しているかを含む）、フィールドにおける正統的行為を支配するルールに関する共有された（合意されているとは限らない）理解に基づく、構築されたメゾレベルの社会秩序」と定義される。安定的なフィールドは、行為者が自身や当該フィールド自体を長期間にわたり再生産できる。

また、すべての集合的行為者（組織、氏族、サプライチェーン、社会運動、政府機関など）は、それ自体が複数の戦略的行為フィールドから構成されている（Fligstein and McAdam 2012: 9）。企業や政府機関は複数の部門や職種から構成されており、それゆえ、企業や政府機関自体もフィールドとして成立するだけでなく、各部門や各職種もそれ自体がフィールドとして成立しているといえる。ぎゃくに、企業や政府機関もそれらを包括する、業界や政府全体からなるフィールドの一部である。フィールドは入れ子構造であるといえる。

フリグスタインやマックアダム自身は明示していないものの、戦略的組織フィールドがかならずしも入れ子構造であるとは限らず、あるフィールドが複数のフィールドを横断している場合も考えられる。たとえば、複数の企業を横断して組合員を組織している職業別労働組合と、各企業との関係がこれに相当するだろう。

### (2) 有力者と劣勢者、ガバナンス機構

有力者と劣勢者、ガバナンス機構は、フィールドの構成要素である。有力者は、「フィールドにおいて絶大な影響を行使し、その利害や見解が戦略的組織フィールドの支配的構成に強い影響を与えがちな行為者」と定義されている。一方、劣勢者は、「フィールドにおいて特権の少ないニッチを占めており、フィールドの機能に対して影響力をあまり行使しない行為者」と定義されている。多くの戦略的行為フィールドが備えているとされるガバナンス機構は、「フィールドのルールの遵守を監視し、一般的にシステム全体の円滑な機能や再生産を促進する役割を担っている」（Fligstein and McAdam 2012: 13-4）。

本論文では原著のchallengersを「挑戦者」ではなく劣勢者と訳している理由は、上記の定義を踏まえると、challengersがフィールド内の序列関係やルールにかならずしも変革を迫る行為者でなく、フィールド内の相対的な「弱者」として位置づけられているからである。

さきに『企業コントロールの変容』（Fligstein 1990）の概要で確認したように、同じ業界において、経営手法や経営トップの手腕により業界全体を牽引する企業もあれば、業界トップの動向を見て追従する企業もある。前者は有力者に相当し、後者が劣勢者に相当する。また同一企業においても、企業全体の経営に対して発言力の強い部門とそうでない部門がある。発言力の強い部門であれば有力者であり、そうでない部門は劣勢者である。

さきに見たように、フィールドを構成する行為者が企業等の集合体に限られず、個人の場合もある。『フィールドの一理論』の共著者のひとりであるマックアダムの専門である、社会運動の場合も、運動団体のなかに運動の中心となるメンバーもいれば、運動に参加しつつも貢献の小さいメンバーもいる。また、個人事業主をメンバーとする団体（医師会や会計士協会など）

であれば、そのなかには団体を主導する中核のメンバーもいれば、団体の方針に異議を唱えず従うメンバーもいることだろう。

ガバナンス機構の具体例は、業界団体や職業団体、労働組合あるいは社会運動団体の本部・事務局である。こうしたガバナンス機構は、フィールド（業界団体や職業団体、労働組合、社会運動団体など）のメンバーがルールを遵守しているか監視する役割のほか、国家を含むほかのフィールドとの渉外業務（広報やロビイングなど）を担っている。ガバナンス機構の対内的業務としては、ルールの遵守の監視や規制のほか、フィールドの日常的な管理運営、メンバーへの情報提供、賞罰などルール遵守の促進、メンバーへの資格や認証の授与が挙げられる（Fligstein and McAdam 2012: 77-8）。

『フィールドの一理論』では明示的ではない、つぎの点を指摘しておく。同一業界という意味で同じフィールドに属している企業であっても、当該業界の団体に加盟しているとは限らない。業界団体に加盟していない企業に対して、業界団体やその本部・事務局といったガバナンス機構は、十分に統制がとれないか、あるいはまったくとれないことが考えられる。業界団体は未加盟企業に対して加盟を働きかける場合もあれば、加盟企業と未加盟企業とのあいだでコンフリクトが発生することも想定される。

### （3）社会的スキルと生に根ざした社会関係的機能

社会的スキルと生に根ざした社会関係的機能について、フリグスタインとマックアダムはつぎのように説明する。まず、戦略的行為は「他者との協力を安定化することにより、社会的界を創造し維持するためにおこなわれる社会的行為者による企て」と定義する。

そのうえで、社会的スキルを、「個人あるいは集合的行為者が、世界や自身の広範な認識への貢献において、人々と環境を解釈し、行為を方向づけ、人々を動員する、高度に発達した認知的能力」であると位置づけ、こうした『生に根ざしたパッケージ』を発見し、互いに関連づけ、利用し（appropriate）、宣伝することは、人間が本来備えている社会的スキルであり、「社会的スキルは個人的能力であって、（おそらく通常は）人間集団全体に分布していることが仮定される」のだという（Fligstein and McAdam 2012: 17）。

社会的スキルは、フリグスタインとマックアダムのフィールド理論のミクロ的基礎として導入された概念である（Fligstein and McAdam 2012: 34-56）。この概念の要点は3つある。

ひとつは、ミクロレベルでの個人や組織による相互行為理論を、ミード（George Herbert Mead）やゴフマン（Erving Goffman）などによるシンボリック相互作用論（Mead 1934=1973；Goffman 1963=2001）を援用して構築している点である。個人か組織にかかわらず、他者の行為や立場、社会的カテゴリーを解釈したり定義づけたりし、こうした解釈や定義を踏まえつつ、状況に応じた適切な行為を通じて他者に働きかけるとともに、自己のアイデンティティを構築する、シンボリック相互作用論が描くような能動的な人間像を、フィールド理論は想定している。

もうひとつは、フィールドの初期段階では、社会運動において典型的に見られるように、個人あるいは少人数がフィールドの形成に大きな役割を果たしていることを考慮している点である。社会運動だけでなく、新たな業界の誕生においては、創始者が他者にどう働きかけ、どう他者から認知されたり協力を得られたりするかが、その後の業界の拡大に影響すると考えられる。

三つめの要点として、社会的行為を説明するにあたって、社会構造による制約とともに行為者の能動性の双方を考慮すべしとする (Giddens 1986=2015)、社会学的な共通認識があるにもかかわらず、実際に社会現象を分析する際には、多くの場合、行為者の能動性が埋没してしまう傾向に対する批判が含まれている。フリグスタインとマックアダムのフィールド理論において、社会的行為が社会構造によって制約される側面だけでなく、個人あるいは組織の能動的側面を社会学的分析へ積極的に活かしていこうとする意図が、社会的スキル概念に反映されていると考えられる。

#### (4) フィールドをとりまく広範な環境

フィールドをとりまく広範な環境は、フィールドに関する先行研究において考慮されていなかったと、フリグスタインとマックアダムは主張する。フィールドに関する多くの研究では、フィールドの内部メカニズムに焦点が当てられており、戦略的行為フィールドとその外部環境との関係について検討されていなかったのだという。フリグスタインとマックアダムによれば、すべてのフィールドは、ほかのフィールドと相互に関連している。

外部環境を構成するほかのフィールドは、3種類の二分法で特徴づけることができる。ひとつは、遠方の (distant) フィールドと近接の (proximate) フィールド、ふたつめは、従属的な (dependent) フィールドと相互依存的な (interdependent) フィールド、残りのひとつは、国家 (state) フィールドか非国家 (nonstate) フィールドである。遠方のフィールドより近接のフィールド (たとえば隣接する業界) からのほうが、フィールドは影響をうけやすい (Fligstein and McAdam 2012: 18-9)。

こうしてみると、フリグスタインとマックアダムのフィールド理論において、外部環境は偶発的な外生変数や攪乱要因の源泉として扱われるにとどまらない。分析の焦点となるフィールドとほかのフィールドとの相互行為過程や、この直後で言及されるように、ほかのフィールドとの日常的な相互行為過程において発生する攪乱要因も、内生変数として時系列的な分析対象として位置づけられているといえる。

新制度学派は特定フィールド内の組織間関係 (山倉 1993) に分析の焦点が当てられてきたが、フリグスタインとマックアダムのフィールド理論は、フィールド間関係、ないしは、「超」組織間関係とでも呼びうる現象にまで、理論の射程を広げているといえる。

#### (5) 外生的ショックと動員、紛争の発生

外生的ショックと動員、紛争の発生について、フィールドが相互依存的であることを踏まえると、ほかのフィールドが日常的な攪乱要因の源泉となると、フリグスタインとマックアダムは指摘する。

ただし、外生的な攪乱要因が劣勢者の立場を改善し、フィールドの既存ルールの変更の機会を提供するわけではない。というのも、有力者は通常、攪乱要因に対応する能力に恵まれており、劣勢者も有力者の権力ゆえに行動を起こすことも少ない。また、有力者はフィールド内外のガバナンス機構と同盟を結ぶこともできる。劣勢者や有力者が集合的にフィールドの脅威や機会を認識し、かつ組織的な資源を動員し、革新的な集合行為に訴えないかぎり、フィールド内の紛争の発生につながらないとされる (Fligstein and McAdam 2012: 19-21)。

脅威や機会ということばは、経営戦略論におけるSWOT分析を想起させる。SWOT分析のS

は内部環境（組織内）のstrength（強み）、Wは内部環境（組織内）のweakness（弱み）、Oは外部環境のopportunity（機会）、Tは外部環境のthreat（脅威）の頭文字である。SWOT分析に代表される経営戦略論のデザイン学派の起源は、チャンドラー（Chandler 1999=2004）とともに、アメリカの組織社会学者・政治社会学者セルズニック（Philip Selznick）の著書『組織とリーダーシップ』（Selznick 1957=1970）にあるとされる（Mintzberg, Ahlstrand, and Lampel 1998=1999: 26）。

セルズニックが社会運動論の古典とされる『テネシー川流域開発公社と草の根運動——公式組織の社会学的研究』（Selznick 1966）の著者であり、同書が新制度派組織理論に対する「旧制度派」組織理論の著書として位置づけられていること（DiMaggio and Powell 1991b）もあわせて踏まえると、経営戦略論と組織社会学に加えて、社会運動論も学説史的に相互影響関係、あるいは、理論的な親和性があるといえる。そもそも、組織や社会運動は戦略的な営みであるため、これらの分野が戦略を想起させる共通概念を使用することは、むしろ当然の帰結であると考えられる。

#### （6）紛争の継続

紛争の継続は、「新たな革新的な行為形態を互いに使用するフィールドの行為者どうして展開される、創発的で持続的な紛争的相互行為の期間」と定義されている。紛争の継続において、革新的な行為のほかに、フィールドを支配するルールや権力関係に関する不確実性や危機の感覚が行為者のなかで共有されている。紛争が継続している期間は、フィールドの行為者から合意を動員し、不確実性を低減するために象徴的な言説等で状況の定義づけをおこなうフレーミング（Benford and Snow 2000）が、しばしば用いられる。また、紛争の決着を図るため、国家が介入することも少なくない（Fligstein and McAdam 2012: 21-2）。

フレーミングは社会運動論で使用されてきた概念である。『フィールドの一理論』が社会運動論だけでなく、組織社会学も射程に入れた理論を構想していることを踏まえると、フレーミングが企業や業界においても多かれ少なかれ見られる現象であることが示唆される。企業内部で従業員向けのスローガンを経営者が掲げたり、業界が規制緩和を目指して政府や業界メンバー企業、あるいは業界外部へメッセージを発信したりする行為は、フレーミングに相当すると考えられる。

#### （7）決着

決着は、有力者あるいは有力者に近い国家機関の関係者が、継続的に対抗的動員をおこなったり、既存の秩序を再確認したりすることにより、フィールドのルールや文化的規範が刷新される段階である。この段階では、フィールド内の確実性が復活し、有力者と劣勢者とのあいだの優劣関係が原状回復するとされる（Fligstein and McAdam 2012: 22-3）。

この決着段階についての説明は、既存のフィールドが外生的ショックで秩序が揺らぎ、紛争が発生したあとに、当該フィールド内で秩序が回復する場合を想定していると考えられる。社会運動が発生し業界が誕生するといった、新たなフィールドが形成される要因についても、『フィールドの一理論』では説明されている。①創発的動員（emergent mobilization）、②社会的スキルと決着への努力（the fashioning of a settlement）、③国家による促進（state facilitation）、④内部ガバナンス機構、の4つが要因として挙げられている（Fligstein and

McAdam 2012: 86-96).

創発的動員は、集合的行為者が利害への機会や脅威を認識し、新たな相互行為を構築する過程を指す (Fligstein and McAdam 2012: 91). こうした相互行為の過程において、社会的スキルを有する行為者が新たなルールや共通目標を構築し、フィールドの形成を目指す。フィールドの形成過程では、国家が促進的役割を果たすこともあり、内部ガバナンス機構の設置がフィールドの安定化に寄与することも多いという。

4.2 フィールド理論の見取図

以上のうち、(1) 戦略的行為フィールド、(2) 有力者と劣勢者、ガバナンス機構、(3) 社会的スキルと生存のための社会関係的機能、(4) フィールドをとりまく広範な環境、は、フィールドの構成要素や外部環境に相当する。そして、(5) 外生的ショックと動員、紛争の発生、(6) 紛争の継続、(7) 決着、はフィールドの時系列的な変容に関する段階を説明している。フィールドの構成要素や外部環境、ならびにフィールドの時系列変容を図示すると、それぞれ図1や図2のとおりとなる。

4.3 フィールド理論の適用事例——公民権運動と世界金融危機

『フィールドの一理論』の第5章 (Fligstein and McAdam 2012: 114-63) では、フィールド理論の適用事例が2つ例示されている。ひとつは、1932年から1980年までのアメリカにおける

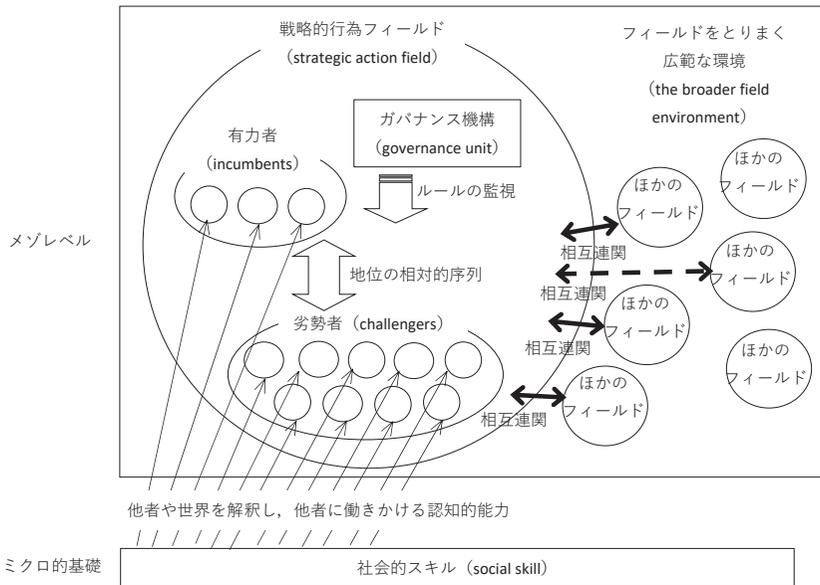


図1 フィールドの構成要素と外部環境

(出所) Fligstein and McAdam (2012) に基づき、筆者作成。

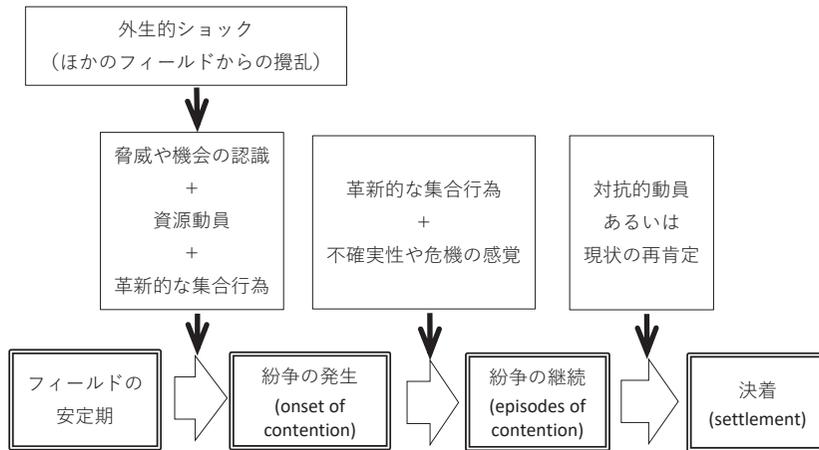


図2 フィールドの時系列的変容

（出所）Fligstein and McAdam (2012) に基づき、筆者作成。

人種をめぐる紛争、もうひとつは、1969年から2011年までのアメリカにおける抵当証券業界の盛衰についてである。

前者は社会運動論の政治過程論における古典として位置づけられている、マックアダム著『1930～1970年における政治過程と黒人反乱』（MacAdam 1999）に基づきつつ、フィールド理論の適用可能性を例証している。後者は2008年9月の世界金融危機（いわゆる「リーマン・ショック」）へと至るアメリカ金融業界の金融商品市場の変遷を対象として、フィールド理論を適用しており、のちにフリグスタインの単著『銀行はやらかしてしまった——金融危機の解剖学』（Fligstein 2021）として刊行されている。適用の実例の概要はつぎのとおりである。

アメリカにおける黒人差別の撤廃は、1955年から1970年にかけての公民権運動に焦点を当てて、社会運動の成果として語られることが多い。しかし、よく知られたリンカーン大統領による奴隷解放をはじめ、あまり知られていない政治的背景を含め、黒人差別とその撤廃に向けた歴史は長い。『フィールドの一理論』では黒人差別の撤廃を、社会運動としての公民権運動にのみ焦点を当てず、州や連邦政府の政治状況や経済的利害、政治・経済情勢の変化における諸フィールド間の相互作用の歴史のなかに位置づけて検討している。

また、社会運動としての公民権運動が凋落したのち、むしろアフーマティブ・アクションとして政策に反映され、差別撤廃のフレームがアメリカ先住民やヒスパニック系アメリカ人、女性、障がい者へも拡張されるとともに、これらに関する社会運動を活性化することにもつながった（Fligstein and McAdam 2012: 115-39）。

世界金融危機に至る過程も唐突に生じたわけではなく、アメリカの抵当権の証券化が、将来の金融危機をもたらしたという。1960年代にベビーブーマー向けに住宅供給を拡大する目的を端緒として、アメリカ連邦政府は抵当権の証券化を可能にした。抵当権の証券化市場が発展し

ていくと、抵当権を仕入れる機関や、複数の抵当権をパッケージ化して証券化する機関、証券化された抵当権を販売する機関のように、抵当権の証券化市場が拡大していく。

所有する証券を担保に借入をしつつ、ほかの証券を購入する金融機関が増加していく。また、証券化市場の拡大を図るため、信用度の劣る低所得者向けの融資（サブプライムローン）に基づく抵当権の証券化市場も登場する。抵当権の証券化市場にさまざまな機関が介在した結果として取引関係が複雑化したことも、アメリカ連邦銀行を含め世界金融危機の予兆が事前に把握できなかった要因であると、『フィールドの一理論』では分析されている（Fligstein and McAdam 2012: 140-63）。

## 5. 結論

フリグスタインとマックアダムのフィールド理論が、業界の変容を分析するにあたってどの程度有望であるのかが、本論文の問題設定であった。彼らのフィールド理論は業界の変容を分析に対して有望であると考えられる。その理由は以下のとおりである。

1つめの理由は、「業界」は相互協力関係を効率的に進めるにあたってしばしば業界団体を設立するが、彼らのフィールド理論は業界団体の本部・事務局を主要な行為主体として位置づけているからである。2つめの理由は、「業界」を一枚岩として描くのではなく、業界内部にさまざまな利害関係や観点が交錯しており、まさにその交錯が外生的要因とともに、業界の変容に影響を与えよう点を想定しているからである。3つめの理由は、「業界」それ自体が単独で存在しているのではなく、他業界とも多かれ少なかれ相互関係にあることを想定するうえ、関係のあり方が諸業界の行く末に影響を与えようことを指摘しているからである。

4つめの理由は、組織などの行為主体が合理的計算のみによって行為するのではなく、非合理的な行為や認知的な枠組みに拘束されて行為する点も考慮に入れているからである。5つめの理由は、「業界」が特定の状態を不変的に維持するだけでなく、その誕生や形成、変容、衰退や崩壊までも想定しているからである。

フリグスタインとマックアダムのフィールド理論は、業界の変容を理解するうえで有望な理論である一方、難点も指摘できる。ひとつは、組織社会学や経済社会学、社会運動論の知見を統合したこの理論を使いこなすためには、それぞれの分野における概念やその適用方法を含め、十分な理解が必要とされる点である。もうひとつは、統合的・総合的な理論であるがゆえに、概念体系が一般的・抽象的である点である。

こうした難点を補完し、より具体的なレベルで業界の変容を分析するためには、たとえば、専門職研究の概念体系や分析方法を応用することが考えられる。専門職研究は行為者の単位がしばしば個人であって、企業のような集合的行為者ではない。しかし、フリグスタインとマックアダムのフィールド理論におけるガバナンス機関（専門職団体とその本部・事務局）の役割について、専門職研究で研究が蓄積されていると考えられる。今後の研究課題としたい。

<付 記> 本論文は科学研究費助成事業（基盤研究（C））「日本型雇用システムにおける有料民営職業紹介事業の組織と業務プロセスに関する研究」（課題番号21K01920）の成果の一部である。

## 参 考 文 献

- Benford, Robert D. and David A. Snow, 2000, "Framing Processes and Social Movements: An Overview and Assessment," *Annual Review of Sociology*, 26, pp. 611-39.
- Bourdieu, Pierre, 1979, *La distinction: Critique sociale du jugement*, Paris: Éditions de Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳, 『ディスタンクシオンⅠ——社会的判断力批判』, 『ディスタンクシオンⅡ——社会的判断力批判』, 藤原書店).
- Bourdieu, Pierre, 1981, *La nobles d'état: Grandes écoles et esprit de corps*, Paris: Éditions de Minuit. (=2012, 立花英裕訳, 『国家貴族Ⅰ——エリート教育と支配階級の再生産』, 『国家貴族Ⅱ——エリート教育と支配階級の再生産』, 藤原書店).
- Chandler, Alfred D. Jr., 1990, *Strategy and Structure*, Cambridge, MA: MIT Press. (=2004, 有賀裕子訳, 『組織は戦略に従う』, ダイヤモンド社).
- DiMaggio, Paul J. and Walter W. Powell, 1991a, "The Iron Cage Revisited: Institutional Isomorphism and Collective Rationality in Organizational Fields", in Walter W. Powell and Paul J. DiMaggio (ed.), 1991, *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, Chicago: University of Chicago Press, pp. 63-82.
- DiMaggio, Paul J. and Walter W. Powell, 1991b, "Introduction", in Walter W. Powell and Paul J. DiMaggio (ed.), 1991, *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, Chicago: University of Chicago Press, pp. 1-38.
- Fligstein, Neil, 1990, *The Transformation of Corporate Control*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Fligstein, Neil, 2001, *The Architecture of Markets: An Economic Sociology of Twenty-First-Century Capitalist Societies*, Princeton: Princeton University Press.
- Fligstein, Neil, 2008, *Euro-Clash: The EU, European Identity, and the Future of Europe*, Oxford: Oxford University Press.
- Fligstein, Neil, 2021, *The Banks Did It: An Anatomy of Financial Crisis*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Fligstein, Neil and Doug McAdam, 2012, *A Theory of Fields*, Oxford: Oxford University Press.
- Giddens, Anthony, 1986, *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Cambridge: Polity Press. (=2015, 門田健一訳, 『社会の構成』, 勁草書房).
- Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. (=2001, 石黒毅訳, 『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』, せりか書房).
- 長谷川公一, 2003, 『環境運動と新しい公共圏——環境社会学のパーспекティブ』, 有斐閣.
- 片桐新自, 1995, 『社会運動の中範囲理論——資源動員論からの展開』, 東京大学出版会.
- MacAdam, Doug, 1999, *Political Process and the Development of Black Insurgency, 1930-1970*, (2<sup>nd</sup> ed.), Chicago: University of Chicago Press.
- Mead, G. Herbert, 1934, *Mind, Self, and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago: University of Chicago Press. (=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳, 『精神・自我・社会』, 青木書店).
- Mintzberg, Henry, Bruce Ahlstrand, and Joseph Lampel, 1998, *Strategy Safari: A Guided Tour through the Wilds of Strategic Management*, New York: Free Press. (=1999, 齋藤嘉則監訳・木村充・奥澤朋美・山口あけも訳, 『戦略サファリ——戦略マネジメント・ガイドブック』, 東洋経済新報社).
- 小川慎一, 2017, 「政府による高度ホワイトカラー職業紹介事業の創出——人材銀行の誕生とその背景」, 『横浜経営研究』38(1), 23-47頁.
- 小川慎一, 2020, 「政府による高度ホワイトカラー職業紹介事業の盛衰——人材銀行の展開から廃止まで」, 『横浜経営研究』40(3-4), 87-111頁.
- 小川慎一, 2022, 「労働市場の創造——1960～70年代における高度ホワイトカラー有料民営職業紹介事業の誕生」, 『横浜経営研究』42(3-4), 27-46頁.
- Powell, Walter W. and Paul J. DiMaggio (ed.), 1991, *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, Chicago: University of Chicago Press.
- 佐藤郁哉・山田真茂留, 2004, 『制度と文化——組織を動かす見えない力』, 日本経済新聞社.
- Selznick, Philip, 1957, *Leadership in Administration*, New York: Harper and Row. (=1970, 北野利信訳, 『新訳 組織とリーダーシップ』, ダイヤモンド社).
- Selznick, Philip, 1966, *TVA and the Grass Roots*, New York: Harper and Row.
- 富永京子, 2025, 『なぜ社会は変わるのか——はじめての社会運動論』, 講談社.

山倉健嗣, 1993, 『組織間関係——企業間ネットワークの変革に向けて』, 有斐閣.

〔おがわ しんいち 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院教授〕

〔2026年1月26日受理〕